かたりべ147

豊島区立郷土資料館・芸術文化推進グループだより

生誕100年

The 100th Memorial of Miyotaro Sagawa

佐川美代太郎展

今こそ知りたい！「描く」ということ

企画展「生誕100年　佐川美代太郎展　今こそ知りたい！「描く」ということ」を、二〇二四年一月一四日(日)まで開催しております。

今年で生誕一〇〇年を迎える、豊島区ゆかりのマンガ家・佐川美代太郎（一九二三―二〇〇九）の初の回顧展です。

会社員として働きながら独学でマンガを描き、デビューを果たした佐川は、絵本や絵画、立体作品や屏風など、多岐にわたる作品の数々を残しました。

佐川作品の源流には、中国哲学や仏教思想、速水御舟、ピカソなど、さまざまな学問や思想、古今東西の芸術家たちの作品があります。

佐川美代太郎とは、どんな作家だったのでしょうか。本展では、佐川の「描

く」ということの根底にあった言葉や思想などをキーワードに、五〇年に渡る創作の歴史に迫ります。

《寒山拾得》11月18日（土）まで展示

会場風景

第1章　佐川マンガのはじまり

新聞・雑誌の漫画投稿欄への投稿がきっかけとなり、佐川はマンガ家としてデビューしました。掲載作品のスクラップブックや、はじめて新聞に連載した作品『ほいきた君』単行本などをご紹介しています。

第2章　自分だけのマンガをめざして

佐川の代表作として知られる「汗血のシルクロード」「望郷の舞」「冒頓単于」は、それぞれ中国の歴史をもとにストーリーが構成されています。

第3章　学ぶ・教える

佐川は、一九七三年に京都精華短期大学（現・京都精華大学）に設置されたマンガクラスに教授として就任しました。学生たちとともに動物園などで描いたスケッチなどを展示します。

第4章　佐川美代太郎のまなざし

スケッチをもとに描いた絵画や、絵本原画、立体作品などを、愛用していた道具とともに展示します。

第5章　「描く」ということ

佐川が晩年に取り組んだ仏教関係の絵本原画、大型屏風作品を展示します。屏風作品は会期中展示替えを行います。

大ケース内屏風作品展示替えスケジュール

※変更する場合があります。

作品名	展示期間
《寒山拾得》六枚組パネル	10月28日（土）～11月18日（土）
《ダルマ（法）に東西なし》六曲一隻	11月21日（火）～12月3日（日）
《菩提楽》四曲一隻 《水禽図》四曲一隻	12月5日（火）～12月16日（土）
《菩提楽》四曲一隻 《妙音無絃》二曲一双	12月19日（火）～12月27日（水）
《鷹仰富士》六曲一隻	1月5日（金）～1月14日（日）

レファレンスルームでは、佐川美代太郎長女・小林美菜子氏のインタビュー映像（二〇二〇年収録）を放映しております。

佐川美代太郎の生涯については、『かたりべ』一二〇号（二〇一六年七月八日発行）、作品については一三八号（二〇二〇年九月二五日発行）、佐川美代太郎長女・小林美菜子氏のインタビューについては一四二号（二〇二二年三月二五日発行）をご参照ください。

『かたりべ』バックナンバーは、郷土資料館ホームページでご覧いただけます。こちらのQRコードからご覧ください。↓

（文学・マンガ　佐伯百々子・西方ゆり恵）

担当学芸員によるギャラリートーク

を開催します。

日程：12月３日（日）、１月７日（日）

各14時から30分程度

申込不要・当日直接会場へお越しください。

ホームページ

←図録やグッズの情報は
ホームページをご覧ください。

作品を見る読む 24

作品調査中！島田由紀子編

番外編

一九八四年の開館当時に郷土資料館が調査の基に発表した「さくらが丘パルテノンのアトリエ住宅」の地図[i]があります。豊島区の長崎地域に位置するこのアトリエ村に、一九三九、四〇年ごろに住んでいた幾人かの画家の名前が家の分布とともに記録されているものです。多くの男性作家の名前に混じって、島田由紀子（一九〇九－二〇〇七）の名の記載があります。この女性の作品は例えば大分県立美術館に一点ありますが、未だ区の収蔵はありません。かねてより気になっていた存在でしたがこの度ご縁があり、ご遺族のお宅にて作品を見せていただくことになりました。

複数回に及ぶ調査では、アトリエ内の花やピアノを背景に描かれた油絵、女性モデルなど人物画や、おそらくご自宅を描いたであろう赤い瓦屋根の戸建ての外観スケッチなど多くの油絵やスケッチを実見しています。古い時期の油絵は室内画が多く、時が進むにつれて色調や絵筆のタッチなど画風も変化し自然や外国の風景画が増えていきます。

島田は大分県生まれの画家です。山下鉄之輔に師事し、大分県女子師範学校を卒業後は教師をしながら大分県美術家協会に出品。一九三七年の光風会入選を機に上京し、アトリエ村にやってきて子育てと平行して作家活動を続けたようです。戦後は女流画家協会などに出品し個展も開催しています。「島田由紀子氏（洋画、主体美術）は第二パルテノンの北から二列目の西の家の方に住んでいたが、おまわりさんで、絵描きでもあった臼井千秋氏と結婚した。島田氏の妹は麻生三郎の夫人である。」[ii]「島田さんの家にイタリアで勉強された声楽家のお兄さんが一緒に住んでいた。パルテノンでピアノがあるのは、ここだけであった。」[iii]豊島区のこれまでの調査では島田由紀子という画家について、他者によって語られる断片的な情報しか人物を知る術がありませんでしたが、麻生三郎の親戚であり互いに仲が良いこと、実際にピアノが自宅にあったこと、描くためにフランスによく飛んでいたことなど、ご遺族からアルバムを見ながら生きたお話をお伺いすることができました。アルバムの中にはアトリエ付き住宅に必ずあった、天窓の下でポーズをとる作家の姿もありました。

さて池袋モンパルナスの作家と聞いて、思い浮かぶ作家の名前は誰でしょうか。日本近代美術史において著名な作家も幾人かいることでしょう…もしかして、その作家は男性ばかりではないでしょうか？一九三〇年頃から建ち始めたアトリエ付貸家にも女性の作家が住んでいたという史実は、例えば当時の団体公募展の出品目録にいくつも見つけることができます。作品名、名前と一緒に、（今では考えられないことですが）住所も載っているためで、豊島区の住所は多くあるのです。しかし多くの人が長くは録されていません。今となっては彼女達の作品を目にする機会は難しいものとなっています。豊島区の戦争被害や、女性が家庭に入り、内助の功とならなければならなかった社会の風潮などで、多くの女性作家が筆を折らざるをえなかったことは想像に難くありません。[iv]男性作家の数に比べると女性作家は圧倒的に少ない－今や美術史の世界では周知の事実ですが現に豊島区で所蔵している作品の作家も九割近くが男性作家に占められています。見失われた女性作家の姿を求めて、これからも続く調査で新たな発見があれば歴史は一層厚くなり、多角的な検証が進められることでしょう。

（美術　堀口 麗）

作品調査中の様子。絵に囲まれています。

i 「さくらが丘パルテノンのアトリエ住宅」『豊島区立郷土資料館常設展示図録』

ii 山辺昌彦「長崎アトリエ村の形成と美術家達の生活」『生活と文化』豊島区立郷土資料館　一九八八年

iii 齋藤求は島田の家の隣に住んでいたことがあるという。「齋藤求氏談話」『長崎アトリエ村史料』豊島区立郷土資料館　一九八七年

iv アトリエ村に住む画家の妻となり、自身の芸術活動を辞めた女性の証言が多くある。豊島区児童女性部女性青少年課編『風の交差点―豊島に生きた女性たち』第一集　一九九二年、同第二集　一九九三年　ドメス出版

飯能倉庫温湿度計測結果概報

■収蔵庫の環境監視

博物館資料を保管する収蔵庫では、資料を守り伝えていくために収蔵庫内の継続的な環境監視を行ない、資料にできるだけ負荷を与えないように努めています。昆虫トラップや温湿度計による調査は環境監視の代表的な方法です。

令和3年9月末に竣工し、現在当館の生活資料を収蔵している飯能倉庫（埼玉県飯能市に所在）2階部分では、不定期に月4回の整理作業を行なっています。本館から遠く離れているため日常的に点検作業を行なうことはできませんが、デジタル方式の温湿度計を設置して、資料がどのような環境に置かれているかということを確認してきました。

ここでは、令和4年3月から令和5年2月までの約1年間に収集した温湿度データから、飯能倉庫の収蔵庫機能と課題について触れたいと思います。

■計測方法

温湿度計は、計測結果がデータ保存できる測器（KT-255F）を使用しました。

飯能倉庫は事務棟と倉庫棟に分かれており、倉庫棟には生活資料を収蔵している部屋7つのほか、作業室と書庫があります。測器は、事務棟に1か所、倉庫棟に9か所、屋外に1か所設置しました。屋外に設置するのは、倉庫内が外からどのような影響を受けているか、あるいはどれだけ影響を遮断しているかを比較によって確認するためです。

■倉庫周辺の環境

飯能倉庫屋外に設置した温湿度計の結果では、計測期間中の気温がマイナス6．2℃から39．4℃でした。表1の赤線が温度変化を示していて、8月に向けて上昇し1月に向けて降下するゆるやかな季節変化がみてとれます。細かく上下して帯のようにみえるのは日々の気温変化によるものです。

湿度（青線）は変動が大きく、期間中の平均は約91．9％でした。この高湿度は、飯能倉庫の敷地が林に接していることや、倉庫の日陰になっている位置で計測していたことが原因と考えられますが、いずれにしても倉庫内に湿気を取り込まないように注意する必要がありそうです。

また、飯能市の緑豊かな土地では、テントウムシやカメムシが二重窓をこえて事務室に入り込み、1階シャッターの隙間からはクモやヤスデやゲジゲジも侵入します。今のところ2階倉庫棟への侵入は確認されていませんが、注視しています。建物への侵入を防ぐ対策は難しく、頻繁に清掃しながら除去しているところです。

■倉庫棟の温湿度

倉庫棟に設置した測器の一つから倉庫内の温湿度の動きをみてみましょう（表2）。一見して、屋外に設置した温湿度計の結果と比べ温度も湿度も日々の変動幅が小さく抑えられています。これは倉庫の気密性の高さを示しているともいえます。大きな温湿度の変動は資料の劣化を早めてしまうため、良い効果です。

計測期間中、温度は7．4から24．1℃、湿度は18．2％から68．7％でした。夏季は6月から9月に稼働させている除湿機によって高湿になることを避けています。一般に高湿はカビを発生させるリスクを高め、カビの発生によって資料を損なうことがあるためです。

資料保存に求められる湿度環境は資料の材質によっていくらか異なります。ただ、現在の飯能倉庫での資料の収蔵状態が材質ごとに並べて部屋分けされているわけではないことから、一律に60％を大きく超えないよう注意しています。

飯能倉庫の場合、現在は冬期の乾燥が課題で、木製品のひび割れ等を懸念しています。常に空調機を稼働させておく方法もありますが、電気代が高くなってしまいます。コストパフォーマンスを考えながら試行錯誤を続けているところです。

（郷土　鄧　君龍）

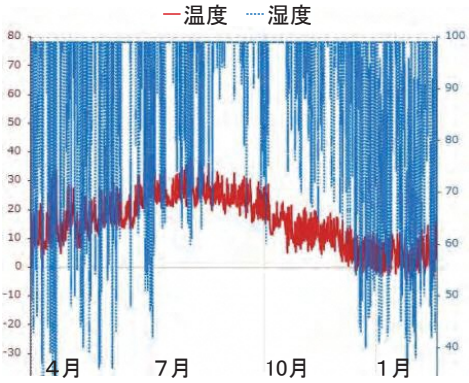

表1　屋外の温湿度

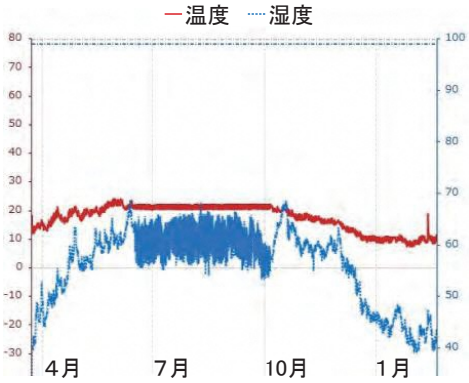

表2　倉庫棟の温湿度

トキワ荘通り昭和レトロ館 常設展資料のみどころ①

昭和の子どもたちを魅了した「どんどん焼き」

トキワ荘通り昭和レトロ館（豊島区立昭和歴史文化記念館）の展示室1～4では、令和五年七月一日(土)より常設展を開催しています。今回は展示室1「矢島勝昭（やじまかつあき）　昭和のくらしギャラリー」の常設展資料の中から、昭和の子どもたちの食文化を垣間見ることができる絵画作品、『どんどん焼き』をご紹介します。

矢島勝昭氏の絵画作品は、矢島氏自身が体験した昭和の日常生活を描いているものが多く、この『どんどん焼き』も矢島氏の子ども時代の思い出をもとに描いた作品となっています。

この作品に描かれているどんどん焼きは、駄菓子屋の店内に鉄板が設置されており、子どもたちがその鉄板の上で様々な形を作って焼いているように見えますが、実際はどのような食べ物だったのでしょうか。

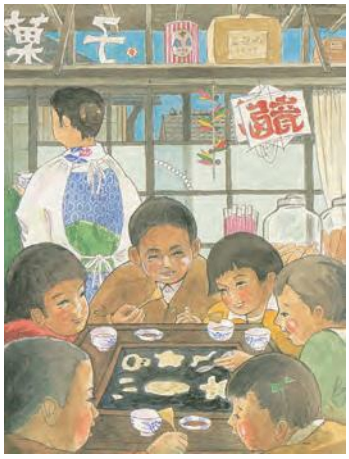

図1：矢島勝昭画『どんどん焼き』（豊島区立郷土資料館所蔵）

どんどん焼きは、江戸時代末期から明治時代に東京の下町で誕生した「文字焼（もんじや）き」から派生し、大正から昭和にかけて流行した軽食であり、後の「お好み焼き」の祖型の一つといわれています。鉄板の上に水で溶いた小麦粉を流し入れ、野菜、肉、海鮮、餡などの具をのせて焼いたもので、子どものおやつや大人の総菜として人気を博しました。名前の由来は諸説ありますが、文字焼きの屋台が「どんどん」と太鼓を叩いて売り歩いていたため、どんどん焼きと呼ばれるようになったという説が有力です。

池波正太郎氏のエッセイ『食卓の情景』では、少年時代のエピソードとして、どんどん焼きの屋台の思い出が語られています。昭和初期から十年代にかけて東京の下町の屋台でよく見かけたこと、大きな鋏（はさみ）と厚手のハガシを用いて、何十種類ものメニューを提供していたこと、屋台の店主と親しくなり、一緒に新メニューを考案したことなどがあげられています。調理方法、各商品の値段、店主との会話なども詳細に記されており、どんどん焼きに関するエピソードは、少年時代の池波氏にとって、とても印象深いものとして記憶に残っていたことがうかがえます。

一方、子ども時代の矢島氏が親しんだどんどん焼きは、屋台ではなく駄菓子屋の店内で、自分たちで好みの形を作りながら焼いて食べるものでした。トキワ荘通りレトロ館に展示中の『どんどん焼き』のキャプションには、矢島氏が当時の思い出をもとに編んだ詩（注1）を掲載しています。

どんどんやき

うさぎが　やける
だるまが　やける

どんどんやきは
おいしい
うどんこと
おしゃべりを
かきまぜるから。

うさぎを　たべる
だるまを　たべる
おしゃべりを　たべる。

「うどんこと　おしゃべりを　かきまぜる」「おしゃべりを　たべる」といった表現が印象的な詩となっています。この詩から、矢島氏が親しんだどんどん焼きは、友人たちとのおしゃべりがより一層美味しさを引き立てるものであったことが伝わってきます。

昭和の子どもたちを魅了したどんどんやき――その美味しさの秘密は、店主や友人たちといった、共に過ごす仲間との「おしゃべり」にあったのかもしれません。

（郷土　塩見香奈）

【注1】矢島勝昭『画集二十世紀の情景　池袋・雑司が谷』、モチの木工房、一九九九年より

【参考文献】池波正太郎『食卓の情景』、新潮社、一九八〇年／岡田哲『コムギ粉の食文化史』、朝倉書店、一九九三年／岡田哲『たべもの起源事典』、東京堂出版、二〇〇三年

図2：トキワ荘通り昭和レトロ館、展示室1「矢島勝昭　昭和のくらしギャラリー」風景写真

区制90周年特別展 開催報告
「豊島大博覧会 ～過去から学び、今日を生き、未来に希望～」

区制90周年特別展「豊島大博覧会」は、昨年一〇月一日から始まり、途中、開館時間と会期を延長して今年五月二八日まで、一八三日間にわたり、延べ四万四三三六名の来館者を迎え、盛況のうちに終了しました。

通常の特別展の約三倍の会期の長さと過去最多の来館者数に加え、郷土資料館が入っている建物の七階フロア全体を使った会場づくりと、展示された作品・資料の多さなど、まさに異例づくしの特別展となりました。

本展の特色の一つは、サブタイトルにあるように、近郊農村から国際アート・カルチャー都市へと大きな変貌を遂げた豊島区の歴史と現在を紹介するとともに、区制一〇〇年に向けた豊島区の将来像を紹介する未来展示（都市計画課担当）を設けたことです。展示は時代別に五章に分け、第三章以降は池袋が中心となるため、第一・二章では区全域を紹介する内容としました。

第一章「豊島区誕生前史　むかしのとしま」（明治・大正期）

第二章「豊島区の誕生と人々のくらしとしまくのはじまり」（昭和～戦後）

第三章「豊島区の繁栄と副都心池袋　さかえるとしま」（戦後～昭和末期）

第四章「国際アート・カルチャー都市としまくのいま」（平成・令和期）

イケちゃんランド（水戸岡鋭治氏制作、イケバスで未来のとしまの街へ）

第五章「輝く未来　としましんじだい」

特色の第二は、高さ四メートルの展示室の壁一面とケース内に、隙間なく並べられた作品・資料の多彩さと数の多さです。明治期の内国勧業博覧会に倣い、令和版の「豊島大博覧会」では、区が所蔵する郷土、美術、文学・マンガの作品・資料を中心に、協力者からの提供写真、借用作品・模型、新作のジオラマなど約六四〇点を展示しました。

これらの多彩な作品・資料をテーマに沿ってどう融合させるか、従来の展示概念をこえる挑戦であり、配置や展示方法など何度も検討を重ね、苦心しましたが、特別協力いただいた四名の先生方のお力添えもあり、博覧会ならではの作品群の迫力と、豊島区の豊かな歴史・芸術文化を体感いただける仕上がりになったかと思います。

展示の見どころは、本誌一四三号～一四五号に掲載していますが、来館者に一番人気だったのはジオラマと模型でした。山本高樹氏制作の旧豊島区役所周辺と池袋駅東口・西口周辺のジオラマ三作品、特別出展の模型二作品（隈研吾建築都市設計事務所所蔵）、ハレザ池袋模型（鹿島建設㈱所蔵）、としまエコミュージタウン模型（区所蔵）、そして常設展示の長崎アトリエ村と池袋ヤミ市模型は、本展の目玉となりました。

また長さ六メートルの「写真でたどる豊島区年表」は、導入展示として来館者が最初に足を止め熱心に読む姿が見られました。さらにアトリエ映像作品や景観写真のスライドショー、植田志保氏制作の作品映像、池袋駅周辺まちづくり紹介動画（都市計画課）などの映像も七か所で上映しました。

また壁上部の作品・資料は見づらいため、壁ごとに配置図と名称を記したレイアウトキャプションシートを作成し、オペラグラスの貸出しや高精細画像を拡大して作品を鑑賞できる「豊島区ナビ」を設置しました。ナビは地図や写真のレファレンスにも活躍しました。

床にはクイズシートを九か所貼り、親子連れや子どもたちに好評でした。

関連イベントの講演会や朗読・対談も、毎回一〇〇名を超える参加者があり、ジオラマ解説も盛況でした。

来館者のアンケート調査では、初めて来館された方や一〇～三〇代の若い世代が比較的多く、それぞれの興味関心で展示を楽しんでいただいたようです。区立小学校三・四年生のバスツアーや区内企業の団体見学、SNSや知人・友人の口コミなどの効果もあり、会期終了まで来館者で連日賑わいました。

アンケート集計結果は年報などで紹介し、特別展の成果と課題は今後の事業に活かしていきたいと思います。

特別展にご協力いただいた寄贈者、提供者、関係者の皆様に改めて感謝と御礼を申し上げます。

（郷土　横山恵美）

かたりべ
No.147
2023年11月24日
・
豊島区立郷土資料館
・
東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階
・
電話 03-3980-2351

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS